


# 英 文 学 に

## デ コ ピ ン



### 19 回転する OED

かつての英文学科では、大学院に進学すると『オックスフォード英語大辞典』(The Oxford English Dictionary=OED)をまとめ買いする人がいたものである。もちろん辞書なので数冊だけ買っても意味はないのだが、20冊+補遺3冊をぜんぶ購入するのは大事業で、「まとめ買い」と呼びたくなる。実際、このセットを手に入れた人は「OEDを買ってしまった」と会う人ごとに言っていた。まるで家でも建てたかのように。

値段もそれなりのものだったが、紙版OEDの難題は、何と言っても場所である。各巻も巨大サイズで、重いし、置く場所に困る。物置やガレージに置いたのでは意味がないし買った人はどうしていたのだろう。

英文研究室のOEDは、辞書室のテーブル上に鎮座していた。木製の専用ケースは棚が四方に向いており、回転式の台座をまわしながら背表紙のアルファベットを確認して必要な巻を手取るという仕掛けである。OEDの回転台を囲んで必要な巻に手を伸ばしながら、若き青白き英文科学徒たちが勉学に励んでいた様を今でも思い出す。これぞ辞書室。これぞ英

文学科。

各巻はAの巻、Bの巻などときれいに分かれているわけではなく、[Cham-Creeky]というような実に中途半端で、しかし、それだけにアカデミックな香りが漂う区分けになっていた。そもそも辞書だし、「[Follow-Haswed]の巻が好き！」などということはありえないはずだが、中には英文学精神が高じてそうした不健康な執着にとらわれた人もいたかもしれない。

シェイクスピアの戯曲など、比較的時代が古いものを読みながらOEDを引くと、ちょうど自分が調べたところが用例に出ていることも多い。授業では「この単語の意味はOEDで言うと2番で……」「いやいや3番のaでしょう」などとOED合戦が行われることがあり、そんな中からOED大将とか、OED元帥といった呼び名のぶざわしい強者が頭角をあらわした。皆さん今では立派な学者になった。現在のオンライン版は圧倒的に便利で、クロスレファレンスも簡単だし、腱鞘炎になる心配もないが、中華円卓を囲んでの辞書引き合戦の味方は今でも忘れることができない。

(英文学者)